

海雀



Umi-Suzume

第4号

2007. 12. 25

「東アジア海の塩の話」鶴間和幸	(2)
「東アジア海文明形成の歴史と環境」国際シンポジウム参加記」安介生	(3)
「東アジア学交流講座参加記」青木俊介・放生育王	(5)
2007 年度セクションⅠ「東アジア海文明の形成と環境」共同調査	
「共同調査の概要」村松弘一	(7)
「淮安調査記」菅野恵美	(8)
「徐州調査記」久慈大介	(8)
「滄州黄河故河道調査」長谷川順二	(9)
「蓬萊調査記」柏倉伸哉	(10)
「蓬萊市内班調査記」福島恵	(10)
「秦皇島(秦漢建築遺跡)調査記」中村威也	(11)
「大連大黒山卑沙城遺跡調査記」矢沢忠之	(11)
2007 年度セクションⅡ「東アジア海文明のネットワークと環境」共同調査	
「交流ネットワーク班 共同調査の概要」鐘江宏之	(12)
「吉崎御房調査記」近藤祐介	(13)
「能登半島・若狭湾共同調査報告—古代日本と渤海の交流—調査記」崔弘昭 ..	(14)
「能登半島考察随想」楊煜達	(15)
「寺家遺跡の啓示」韓昭慶	(16)
「雲南省調査記」野本敬	(17)
「水中考古学実習参加記」河野剛彦	(18)
「韓国史跡参観記」濱川栄	(19)
「慶北大学校中央図書館古書室および展示室の調査」村松弘一	(20)
「慶北大学校博物館所蔵 楽浪関係遺物について」大川裕子	(21)
「2007 年度学習院大学アジア研究教育拠点事業 報告会・座談会筆記録(後編)」	(22)
「研究交流報告」高柳信夫	(24)
随想	(24)
彙報	(25)
編集後記	(27)

学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1 tel: 03-3986-0221 (内線 5743)

<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>

東アジア海の塩の話

学習院大学文学部教授 鶴間和幸

この夏休みに静岡に立ち寄ったときに、スーパーで韓国木浦の眞塩を見つけてすぐに購入した。塩の町韓国・木浦^{モッポ}の自然結晶塩であるという。東京の有限会社ユーラシア食品というところが製造している。その解説がおもしろい。

木浦は黄河が流れ込む渤海・黄海に面した古くから塩作りがさかんな韓国の町です。チベットに流れを発し中国全土をなめつくすように流れる黄河は大量のミネラルを運び出します。その流れは渤海へとそそがれ、ここで数十万年も回流し、黄海の砂地層でろ過と浄化を繰り返した海水は良質のミネラルを大量に含んだ世界でも有数の海域です。この海水を昔ながらの塩田製法で結晶させた旨みのある塩です。

この塩になぜ飛びついたかといえば、直前に日本と中国で塩田に出会ったからである。

8月初め渤海国との交流地でもある加賀能登地方を回った。渤海は7世紀末に中国東北地方、ロシア極東、朝鮮半島北部に建国された。渤海に由来する国名をもつ。日本とは密接に外交関係をもった。とくに加賀能登地方は重要な渡来地であり、帰国時の出港地となっている。その加賀能登地方は製陶、製鉄、製塩などの産業でも古来重要であった。陶器を窯で焼き、陶器の鑄型で鉄を鑄造し、鑄造した鉄釜で海水を煮沸して製塩し、そして海域の交通によ

て交易する。そのような海域地方の経済のしくみを現地を訪ねて学んだ。その途中、能登中居鑄物館の入り口で明治に鑄造された煮塩用の浅い鉄釜を見た。直径164cm、深さ21cmと大きい。このような浅釜は18世紀末から作られたという。

その後、中国山東の煙台に韓国^{インチョン}の仁川からフェリーで渡った。そして煙台市博物館で大きな青銅製の煮塩盤が壁に立てかけてあるのを見つけた。直径117cm、深さ9.5cmの大きさだ。こんな大きな盤の青銅器は見たことがなかった。蓬萊市の農民が持ち込んだものらしい。漢代には鉄製の煮塩容器があるのは文献でも知られているが、実物でしかも青銅製のものを見るのははじめてである。江戸明治期の鉄釜とうりふたつの形に驚かされた。裏底に四箇所、竈に固定する突起がついていた。発見された場所は海にも近く、漢代には塩官や鉄官が置かれた場所にも近い。

海水の塩分濃度は平均3%、海辺の人々はそれを20%ほどまで濃くする智恵を持っていた。その後蒸発させやすい平たい鍋でじっくり煮込んで塩を結晶化させた。能登の珠洲では揚げ浜式の製塩が無形文化財になっている。海水を運んで砂地に撒いて蒸発させ、かき集めた砂の上から海水を注いで濃縮した塩水を作る。これを煮詰めれば海塩ができあがる。東アジア海を思い浮かべながら、木浦と能登の塩を何度もなめていた夏であった。



中国・煙台の青銅製塩釜



日本・能登の鉄製塩釜

“東アジア海文明形成の歴史と環境” 国際シンポジウム参加記

復旦大学歴史地理研究中心高級研究員 安 介 生

海洋を紐帯とし、東アジア各地をつなげて一体とする。これは東アジアにおける地理的成り立ちの重要な特徴の一つであり、また東アジア地域の歴史と環境の変遷を観察・検討する上で最も優れた着眼点の一つである。「東アジア海文明形成の歴史と環境」国際シンポジウムの開催は、まさにこのような構想のもとに行われた試みであり、再び成功を収めることとなった。

海洋認識と海洋意識の形成は、東アジア諸国の政治の発展過程と密接に関連する。鶴間和幸氏は報告の中で次のように指摘する。秦国は東に向かって拡張し、内陸国家から準海域帝国へと転換した。そして東方海域の豊富な資源と海浜文化の興隆などは、ともに秦漢時代を生きた人々の心に海洋景観を構築することとなった。

河川と海洋は相連なる。このことは東アジア地域ではおよそ普遍的な地形上の特徴である。川の流れが引き起こす災害の影響は、東アジア諸国において突出している。鄒逸麟氏は長年の研究を総括して、黄河河災が華北平原の地理環境に与える影響について全面的な論評を行った。そして張修桂氏（韓昭慶氏の発言による）の報告は黄河下流の変遷が黄海海岸に及ぼす作用と影響について重点的に討議した。李相勲氏は報告の中で、韓国全羅北道碧骨堤の建造は4世紀の朝鮮半島における気候変化が引き起こした海面変動と海溢に原因があるはずだ、と指摘した。

人の往来と人口の移動によってもたらされる越境の文化交流は、シンポジウム参加研究者が関心を寄せる注目の問題である。黄曉芬氏は中国・日本と朝鮮半島における考古発掘の墓葬形式に対する比較分析を通じて、それらに内在する文化的連関について説得力をもって提示した。崔弘昭氏は非常に詳細かつ正確な事例をあげて、新羅下代における渡海留学の盛況とその社会的背景・影響について説明した。

港湾と航路の研究は、明らかに本会の核心的な内容であった。禹仁秀氏は極めて詳細かつ系統的に韓国蔚山が東ア

ジア地域において国際港となっていく歴史的過程を評述した。呉松弟氏（樊如森氏の発言による）はその発言において、近代の環渤海における港湾の発展は中国北方経済の上昇を促す重大な意義を持ったと高く評価した。村松弘一氏は山東半島蓬萊地域における歴史的な位置づけの変遷について緻密な分析と説明を行った。李宝栄氏は韓国仁川松島経済自由区の建設状況を全面的に紹介し、現代都市の発展におけるグローカリゼーション (glocalization) の趨勢について強調した。

現代情報技術の成果を存分に利用し、地域研究の方法の発展を積極的に促す。このこともまた今回のシンポジウムにおける重要な収穫である。恵多谷雅弘氏はその発言の中で、信頼できる事例から衛星データが古環境と文化遺址の調査において発揮する有効性について説明した。そして満志敏氏は報告において、古河道の復原にあたり、リモートセンシング画像・古文献資料・古地図など多種データを総合的に活用することによって得られる成果を紹介した。こうした研究成果はともに古代文化史・歴史地理研究において現代情報技術の活用で成功した最先端水準を代表しているというべきだろう。

巨視的な視野から東アジア地域の海洋文明の発展と影響関係を見つめることは、国の枠組みにとらわれた研究モデルの限界性を効果的に解消するだろう。ゆえに、何らかの形式によってこのような高水準の国際シンポジウムの成果を編集ならびに公開していくことは、国内外学術界にとって極めて意義深い事業となるであろう。（翻訳：下田誠）

*本稿は2007年11月2日・3日に中国上海の復旦大学歴史地理研究中心において開催された平成19年度第2回東アジア海文明セミナー（プログラムは次頁参照）の参加記です。



“東アジア海文明形成の歴史と環境” 学術討論会

日時	時間	内容
2007年 11月2日 午前	8:30-9:00	復旦大学 報告者参加登録
	9:00-9:10	歓迎の辞 満志敏 (中国復旦大学歴史地理研究中心所長)
	9:10-10:20	報告【第1セッション】 司会：榎間和幸 (学習院大学文学部教授) 1. 黄晓芬 (東亜大学人間科学部教授) 「従考古学研究看東亜地区的文化交流 —以比較藝術文化為中心」 2. 鄭逸麟 (復旦大学歴史地理研究中心教授) 「中国歴史上黄河河患对華北平原地理環境的影響」 集合写真・Coffee Break
	10:20-10:40	3. 高仁秀 (慶北大学校師範大学副教授) 「東亜海海國際港蕪山的地位与变化」
	10:40-11:15	質疑応答
2007年 11月2日 午後	11:15-11:35	質疑応答
	11:45-14:00	昼食
2007年 11月2日 午後	14:00-15:10	報告【第2セッション】 司会：鄭逸麟 (復旦大学歴史地理研究中心教授) 1. 榎間和幸 (学習院大学文学部教授) 「秦漢帝国与東方海城」 2. 張修桂 (復旦大学歴史地理研究中心教授)・韓昭慶 (復旦大学歴史地理研究中心副教授) 「南宋以来黄河下游變遷对海岸的影響」 Coffee Break
	15:10-15:25	3. 李寶榮 (慶北大学校師範大学助教授) 「世界化—地方化 (globalization) 与仁川松島經濟自由區域的開發」
	15:25-17:10	4. 惠多谷雅弘 (東海大学情報技術センター研究員) 「關於衛星数据在对古環境和遺跡的調查中起到的有效作用」 5. 呉松弟 (復旦大学歴史地理研究中心教授)・樊如森 (復旦大学歴史地理研究中心講師) 「近代瀋陽海口与北方經濟發展」 質疑応答
	17:10-17:30	質疑応答

日時	時間	内容
2007年 11月3日 午前	9:00-10:10	報告【第3セッション】 司会：高仁秀 (慶北大学校師範大学副教授) 1. 満志敏 (復旦大学歴史地理研究中心教授) 「多源数据在古河道復原中的应用」 2. 村松弘一 (学習院大学東洋文化研究所助教) 「古代蓬萊城市史与東亜区域史」 Coffee Break
	10:10-10:25	3. 崔弘昭 (慶北大学校講師)
	10:25-11:35	「新羅下代の渡唐留学与黄海」 4. 李相勲 (慶北大学校大学院博士課程) 「4世紀韓半島の氣候変動与碧骨堤」 質疑応答
	11:35-11:50	質疑応答
	12:00-14:00	昼食
2007年 11月3日 午後	14:00-17:00	総合討論【第4セッション】 司会：黄晓芬 (東亜大学人間科学部教授) 1. 中・日・韓各地点機關の研究方向概述 2. 区域研究の理論と方法に関する討論 榎間和幸 (学習院大学文学部教授) 総括・閉会の辞 調査地域紹介 紹介者：満志敏 (復旦大学歴史地理研究中心教授)
	(15:00~15:15 Coffee Break)	
	17:00-17:10	
	17:10-17:30	
	17:10-17:30	
2007年 11月4日	8:00-16:00	具淞江調査 調査地点： 1. 千灯鎮 (古鎮と顧炎武故居) 2. 青龍鎮 (上海地区の宋代古鎮) 3. 青龍江 (古具淞江の彎曲した河道)

主催：
中国復旦大学歴史地理研究中心
日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」
韓国慶北大学校 Asia 研究教育事務局

会場：復旦大学歴史地理研究中心会議室 (光華楼西楼 22 階)
※なお、日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」では、本学術討論会は平成 19 年度第 2 回東アジア海文明セミナーにあたります。

東アジア学交流講座参加記

参加講座: 第1期 洪性鳩・慶北大学校師範大学専任講師

テーマ: 「韓中関係史をどう理解すべきか?」

参加期間: 2007年7月18日~7月20日

学習院大学大学院博士後期課程 青木 俊介

本講座では、東アジアにおける三つの国際関係(韓一中、日一中、日一韓)のうち、日本人には最もなじみの薄い韓中関係の歴史について、主に韓国側の視点から講義が行われた。冊封・朝貢関係を軸とした通史的で極めて詳細な内容であったが、冒頭で前近代における韓国の外交意識が明示されていたため、非常に明快な印象を受けた。その外交意識とは、私の理解したところでは遼東への進出志向と、小中華主義である。

東・西・南を海に囲まれた韓国において、北方の遼東へ進出する気運が高かったことは自然といえる。そして、非中華の諸民族が多く興亡する遼東へ進出するための大義名分こそが、箕子被封東来伝説に支持された小中華主義であった。また、他国の朝貢目的が経済的目的を主としたのと異なり、韓国の朝貢が終始政治的意味合いの強いものであったのは、中華の盟主たる漢族の王朝から、小中華という旗印を保証してもらうという理由からだろう。よって、中国が中華でない時、つまり征服王朝の時期には、自らを唯一の中華の担い手として自任し、抗争や面従腹背の態度で臨んだわけである。とはいえ、小中華主義はあくまで遼東進出のための道具にすぎない。それは、モンゴル族の北元と結びながら明に対して繰り広げた遼東争奪戦に垣間見ることができる。韓国は冊封・朝貢関係において中国に従属しながらも、実はその関係をしたたかに利用し、独自性の強い国家戦略を展開し続けていたのだった。

今回の講座の対象は韓中関係であり、そのために両国の中間地帯である遼東がクローズアップされた。それを日本をも含めた三国の国際関係に広げた時、中間にあるのは東アジア海ということになる。東アジア海においては、いかなる国家戦略の角逐が展開されていたのか。そのような点において、遼東の事例は非常に興味深く感じられた。

参加講座: 第2期 安介生・復旦大学歴史地理研究中心高級研究員

テーマ: 「区域歴史地理から見た中国伝統社会の変遷」

参加期間: 2007年9月12日~9月14日

学習院大学大学院博士後期課程 放生 育王

2007年9月12日~14日、本学創立百周年記念会館4階第四会議室において、東アジア学交流講座(第2期)が開講した。今回の講師は中国・復旦大学歴史地理研究中心高級研究員の安介生氏である。講座の題目は『区域歴史地理から見た中国伝統社会の変遷—歴史時期の山西地区研究を中心として』であった。その内容を簡潔に言うならば、安氏が博士論文としてまとめられた『山西移民史』(山西人民出版社、1999年)と近年発表された最新の学術成果の一部である。個別に整理すると以下の如くである。

第1講「『晋学』研究体系建設の学術意義と問題設定について」では、先秦三晋研究を重視する「小晋学」から、山西地区の歴史時間軸を重視する「大晋学」への転換を提唱された。

第2講「『河東』と『山西』の名称変遷考」では、歴代王朝の政治区域地理構造を念頭に置き、「山西」概念変遷の画期を遼金時代に求められた。あわせて「河東」概念との関係・差異についても論じられた。

第3講「北魏時代郡地区人口問題研究」では、北魏・孝文帝の洛陽遷都を単なる漢化政策の一つとみるのではなく、代郡(平城)の自然災害とそれに起因する食料供給問題にも原因があることを明らかにされた。

第4講「明代中国北方災害性移民運動研究—山西地区の人口変動を考察の中心として」では、災害性移民である「流民」が明朝政府の矛盾した政策の中で粗暴化する姿を描き出し、最終的には明朝崩壊の重要な要素の一つとなることを論じられた。

第5講「自然災害・制度欠陥と中国伝統農業社会における『田地陷阱』の問題—明代山西地区の災害と人口変動状況に基づく検討」では、農民の離郷・棄農重商の原因である「田地陷阱」現象が、自然災害および定額田賦制度の欠陥と顕著な関係にあることを指摘された。

第6講「明代山西宗藩問題研究」では、1 山西藩府の急激な人口増加と、口数ではなく戸数を記す『玉牒』の人口統計のからくり、2 山西藩府が膨張の過程で農民の土地を脅かした歴史、3 山西藩府からみた、宗室供養制度がもたらした「宗祿困境」、の3点を論じられた。

第7講「明清時期における山西の商業流行と列女の問題」では、清代地方文献中に山西の節孝婦女「列女」が多く見

られることを指摘し、その理由について、重商気風の中で発生した行商の夫との別居に関係することを指摘された。第8講「移民運動と山西区域文化の変遷」では、主に3日間を通しての総括が行われた。

本講座の内容は、安氏の本務校・復旦大学でも未だ講じられていないとのことで、我々にとって非常に貴重な体験であった。また、当日は参加者から様々な質問が出され、非常に有意義な時間を共有できた。

東アジア学交流講座参加者の声

【第1期】

○韓中関係史を古代から現代まで詳しく講義していただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。

○三日間連続して1人の先生の講義と謂うことで詳しい説明を聴くことが出来意義深かった。又現在韓国で教えられている歴史観の一端を知る事が出来たと思う。

○燕行使というものの存在を全く知らなかったので勉強になりました。朝鮮通信使の勉強をしているので、それと比較して聞いていました。国境問題もこれだけたくさんの内容をよくまとめて短い時間にお話しして下さいまして、よくわかりました。

○韓中関係史というテーマはたいへんいいテーマなのだと思います。というのは日本では韓国を日本の側からだけ見ているので韓国の他の一面としての中国との関係がくわしく説明されたからです。

【第2期】

○中国語のみの授業というのは、非常に緊張感があり、同時に中国における授業がどのようなものであるかを体験する良い機会となった。今後もこういった試みは続けてもらいたいと思う。

○安先生のご研究は、山西省というひとつの地域をさまざまな角度・材料から考察されていて、大変興味深く拝聴しました。私も山西省を中心に研究する身として、新たな視野を与えて頂いたように思います。英語を織り交えた丁寧なご説明のおかげで大筋ではありますが理解することができました。

○私は中国で歴史系の授業も聴講していましたが、やはり本国の先生に直接お話を伺うのは、非常に臨場感がありました。実際にその歴史を生きた人々のご子孫だからでしょうか。その歴史が立体的に感じるのです。

授業風景



2007年度セクションⅠ 共同調査・各班日程表

	8月3日	8月4日	8月5日	8月6日	8月7日	8月8日	8月9日
連合班					成田→仁川→(船)	(船)→烟台→蓬萊	蓬萊
黄河班						成田→北京→烟台→蓬萊	
運河班	成田→上海	上海→徐州	徐州	徐州→淮安→徐州	徐州→青島	青島→蓬萊	
海港班	(成田→長春→秦皇島→北京→)			淄博	淄博	淄博→蓬萊	

8月10日	8月11日	8月12日	8月13日	8月14日	8月15日
蓬萊→大連	大連	大連→仁川→成田			
蓬萊→滄州	滄州	滄州	滄州	滄州→北京	北京→成田
蓬萊→烟台→青島→北京	北京→成田				
蓬萊集合後は、連合班と合流					

2007 年度セクション I 「東アジア海文明の形成と環境」 共同調査の概要

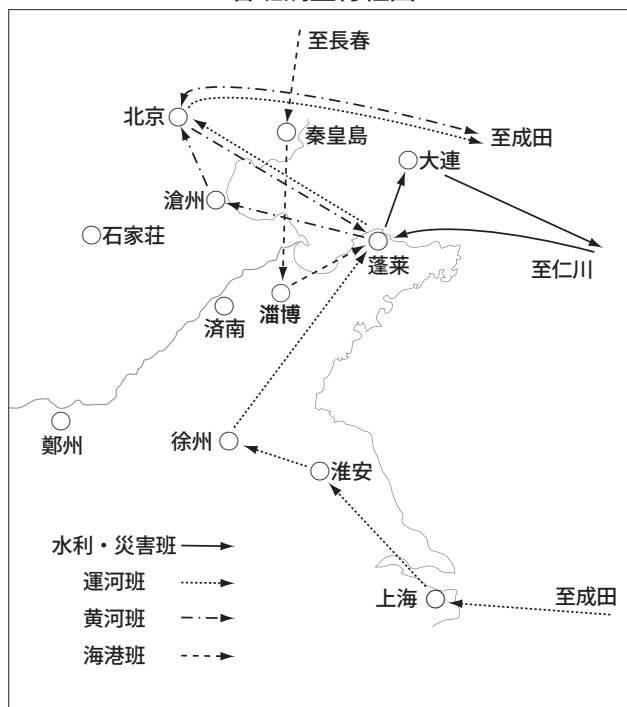
学習院大学東洋文化研究所助教 村松 弘 一

2006 年度の中国調査では運河班、港班、黄河下流班各々が個々のテーマに沿って、別々の期間に調査をおこなった。その成果をうけつつ、2007 年には全ての班が同じ時期に中国調査をおこなった。運河班は江蘇省徐州市・淮安市を調査し、黄河下流班は漢代黄河の河口地域の河北省滄州市を調査し、港班・水利班・災害班の一部は河北省秦皇島市や遼寧省大連を訪れた。これらの個別の調査に参加した日・中・韓の研究者は合計 27 名にのぼる。

セクション I では上記のような個別具体的な事象を調査しつつ、「東アジア海文明の形成と環境」というテーマの下、それらを関連づけてまとめることも同時におこなうことが必要であると考えられる。そこで、2007 年度は個別の調査の前後に、27 名全員が古代東アジア海の中心地のひとつである山東省北部の「蓬萊」に集合した。中国大陸における経済の中心が江南に移った宋代以降の東アジア海域交流史の中心が浙江省寧波や福建省泉州にあるとするならば、唐以前の交流の拠点は蓬萊であると言ってもよい。この都市を軸に黄河・長江の下流域である東方大平原と朝鮮半島・日本列島との交流をも考察することも可能であろう。

次ページ以降、各地の調査の概要について紹介したい。

各班調査行程図



< 調査に参加した研究者 >

[日本]

- 鶴間和幸 (学習院大学文学部教授) A
 小山田宏一 (大阪府教育委員会) A
 黄 曉芬 (東亜大学客員教授) A
 恵多谷雅弘 (東海大学情報技術センター研究員) A
 浜川栄 (早稲田大学高等学院教諭) B
 市来弘志 (学習院大学非常勤講師) C
 中村威也 (大東文化大学兼任研究員) A
 菅野恵美 (学習院大学非常勤講師) B
 水野卓 (専修大学非常勤講師) B
 村松弘一 (学習院大学東洋文化研究所助教) A
 益満義裕 (学習院大学東洋文化研究所客員研究員) C
 柏倉伸哉 (学習院大学東洋文化研究所 R.A.) A
 呉吉煥 (都立大学大学院) A
 久慈大介 (中国社会科学院研究生院研究生) B
 長谷川順二 (学習院大学大学院) C
 福島 恵 (学習院大学大学院) A
 青木俊介 (学習院大学大学院) B
 放生育王 (学習院大学大学院) A
 矢沢忠之 (学習院大学大学院) A

[韓国側研究者]

- 任大熙 (慶北大学校師範大学歴史教育科教授) AC
 禹仁秀 (慶北大学校師範大学歴史教育科副教授) A
 金竜秀 (慶北大学校師範大学倫理教育科助教授) A
 李宝栄 (慶北大学校師範大学地理教育科助教授) A
 李相勲 (慶北大学校大学院) A

[中国側研究者]

- 張小坡 (復旦大学歴史地理研究中心研究生) A
 周運中 (復旦大学歴史地理研究中心研究生) B
 李向韜 (復旦大学歴史地理研究中心研究生) C

凡例 A= 港・水利・災害連合班参加研究者

B= 運河班参加研究者

C= 黄河下流班参加研究者

淮安調査記

文教大学非常勤講師 菅野恵美

淮安は大運河の重要な中継地点であり、歴代王朝が運河維持のために開鑿修繕を行った遺構が多く残る、古運河の重要な考察地点である。唐代の淮安(楚州)には新羅人の居住区があり、円仁も入国・帰国の際に逗留しているように、ここは海から大運河に入るために必経の地であった。現在の淮安は淮陰・楚州・清河・清浦区から成る。まず我々は淮安の中心を東西に流れる里運河に向かった。この運河は明代に開鑿され、淮陰と楚州区を結ぶ。往時、この沿岸には上海への汽船の発着場があり、それを示す石碑が残る。次に馬頭鎮を見学。ここでは、宋代に建てられた水門である恵濟閘遺跡を見る予定であったが見つからず、恵濟祠の跡地を見ることができた。この付近に恵濟閘があったと思われる。馬頭鎮からさらに南下した地点より二河を渡る。二河は淮安と洪沢湖をつなぐ運河である。二河を渡る橋から、二河沿いに洪沢大堤が見えた。洪沢湖には、黄河からの泥水で湖が決壊するのを防ぐため、かなりの距離に渡って堤防が設けられている。

淮安の楚州区では明清期の官署の跡地を見学した。淮安市博物館を訪問したが、陳列はしていないという。職員から唐代の遺構の位置などについて話を伺った。また、街中の商店に紛れてひっそりと残る楚元王廟を参観した。今回は、様々な規模の水閘を見る機会が持てたが、淮安の平坦な地形を見ることで、河床と水閘の管理維持の重要性が理解できた。運河に寄り添う淮安の町もまた魅力的であった。



二河の渡し場

徐州調査記

中国社会科学院博士課程 久慈大介

2007年8月4日から7日まで、運河班は徐州を拠点として周辺地域の踏査を行った。

運河班の目的は、中国を南北に貫く京杭大運河、ないしそれらと有機的な結びつきをもった周辺諸地域が、東アジア海文明のなかでいかなる意味をもち、またいかなる役割を果たしたのかという問いかけに対し、踏査を行うことによってその答えの鍵を探し出すことにあるが、そういった意味において、その近郊を京杭大運河が流れ、また、現在は埋没してしまっているが、かつて戦国の魏が開削した古汴河や、隋代の通済渠がけっして遠くはない流路をたどっていたこの徐州は、東アジア海文明を考える上で重要な地域のひとつであるといえる。

今回徐州では、この地に都した項羽との関連が深い戲馬台遺跡や、漢代楚王の墓である亀山漢墓、獅子山漢墓、そのほか茅山画像石漢墓や徐州市博物館などを訪れた。これらからは、かつてこの地に地域的な国家とも言うべき政体が存在し、その地理的生態的環境を基盤としながら非常に豊かな地域文化を花開かせていたという事実を可視的にとらえることができた。

また、徐州市市区地方海事処のご好意により、市内北東部に位置する京杭運河大橋から徐州港付近まで、京杭大運河を実際に船で航行するという貴重な機会を得、現代に生きる京杭大運河の実情を身をもって体感することもできた。

ところで、日本の古代国家形成期において重要な役割を果たしたと思われるもののひとつに三角縁神獣鏡という銅鏡がある。そのなかに、「銅出徐州」あるいは「銅出徐州師出洛陽」という銘文をもつものがある。これらの鏡が中国でつくられたものであるにせよ、日本でつくられたものにせよ、あるいは楽浪郡でつくられたものであるにせよ、当時、日本と徐州ないしその一帯が、直接的にであれ間接的にであれ、すでに深いつながりを持っていたことをこれらの銅鏡は物語ってくれよう。三角縁神獣鏡はまさに「東アジア海文明の実像を映し出す鏡」ともいえるのでないか、そのようなことを考えながらの徐州での短い滞在であった。



京杭大運河、徐州港付近にて

滄州黄河故河道調査

学習院大学大学院博士後期課程

長谷川 順二

8月10日に蓬萊の合同調査から離脱し、一日がかりで滄州へ向かう。翌11日に滄州市文物局の鄭志利氏と合流し、現地調査を開始した。今回の調査の主眼目は「前漢黄河が渤海へ流れ込む地点」の考察である。

今回も今までと同様に、主に前漢（もしくはそれ以降）の都城遺跡を訪れることが目的である。

11日は東光県～南皮県を周り、東光故城・南皮故城・浮陽故城（宋代滄州城）などを巡った。12日は塩山県博物館の方に案内していただき、高成故城と「斉堤」を回った。この斉堤は春秋五覇の一人である齊桓公が黄河治水のために築いたという伝説がある。また午後には黄驄市の章武故城・「郭堤城」、そして滄州市内の清真北大寺を回る。郭堤城とは現地の呼称だが、実は前漢武帝に由来するということである（武→郭、帝→堤）。『黄驄市志』では、前漢武帝期に封建された「合騎侯」の居城だとしている。

13日には再び黄驄市へ行き、秦代柳県故城や前漢武帝が築いたとされる「武帝台（望海台）」を回る。さらに古代の海岸線である「貝殻堤」を見学した。これは河水が海へと流れ込む際に、その勢いによって周辺に生息する貝を海岸線上に積み上げることで形成される地形である。流量の豊富な大河の河口に形成される特有の地形であり、古代の海岸線を知るのに役立つ。実際に貝殻堤の土を拾ってみると、確かに大量の貝殻が含まれているのが分かる。

14日は西側の献県に行き、戦国燕国が建設したとされ

る燕国長城、現在では「長城堤」と呼ばれる遺跡を見学した。事前調査では文安県や大城県などもっと北方を走っていると思われたが、実はさらに南側の献県にまで到達していたという。

現在、この辺りは麦やとうもろこしなどの穀物栽培が盛んに行われており、各故城もそれらの畑に埋没している。現地の方に案内してもらわなければ見分けがつかない状態である。これは農業が盛んな黄河下流域全体に言える。

その中で今回訪れた郭堤城は、例外的に四方の城壁がすべてきれいに残存していた（写真）。前漢黄河が流路を変更して以降、洪水等の大きな被害を受けなかったこと、また立地自体が現在の黄驄市街区から外れており、住民たちによる農地開墾による破壊を免れたことなどが考えられるが、非常に稀な例である。今まで見た中では河南省濮陽市の戚城遺跡（春秋～漢代）が同様に四辺の城壁を保っているが、それに匹敵する。ただし現地の方によれば、最近ではこの周辺も開発が進み、そろそろ市街区の中に入るのはないかという。戚城は遺跡全体を公園とし、市民の憩いの場として活用しつつ保護を行っている。この郭堤城も、できれば今の良い状態を残してほしいものである。



郭堤城址（黄驄市）

今回の調査では事前に現地文物局への協力を打診しておいたことで、非常に効率的な調査が出来た。鄭氏は結局調査の四日間ずっと我々と行動を共にし、各県の文物管理所や博物館の方々との連絡などを一手に引き受けてくれた。遺跡等の細かい位置は我々では手に負えず、現地の研究者に案内してもらわなければまずたどり着けない所ばかりなので、彼の協力なしにはこの調査は成立しなかった。各県の研究者の方々との連絡を取っていただいた鄭氏、そして直前の申し出にもかかわらず仲介の労を取っていただいた李向韜氏にもこの場を借りて御礼を述べたい。

蓬萊調査記

学習院大学大学院博士後期課程 柏倉伸哉

山東省蓬萊は古くから海上交通の要衝であり、日中韓をつなぐ重要地点である。ここに2007年8月8日夜、日本人18名、韓国人6名、中国人3名が集めた。合わせて27名の日中韓合同調査団である。一人も欠けることなく、これだけの大人数が予定通り集合できたのは喜ばしいことであった。

翌朝8時、集合の後、タクシーに分乗し蓬萊閣に接する登州博物館へと向かった。博物館には、海中より発見された韓国や日本からもたらされた陶磁器なども展示されており、蓬萊の歴史上の存在意義をよく物語っていた。博物館参観の後には、各自自由行動で、蓬萊閣の景点、史跡を巡ることとなった。ここでは紙幅の関係もあるため、筆者が回ることでできたいくつかの景点の紹介に留める。

まずは黄渤海分界座標。黄海と渤海を分ける境界線である。常態がどのようなものであるのか定かではないが、実際に見える海面も黄色と青緑色に分かれていたのは、単なる偶然であったのであろうか。

続いて向かったのは、宋代創建の蓬萊閣。中国古代四大名楼の一つであるという。観光客のあまりの多さには閉口したが、ここからは「備倭城」と呼ばれる宋代から続く軍港遺跡や蓬萊市内を一望の下に見渡せ、それまでの疲労も吹き飛ばす思いであった。

蓬萊閣を後にして、次に備倭城(蓬萊水城)へと向かった。この場所からは、元代の戦艦船が見つかっており、現在古船博物館に展示されている。発掘地点は訪れる人もな



蓬萊閣から水城を望む

く、静かであった。発掘場所を特定し、周りの地形や水城との関係を考察した。そしてその後、古船博物館へと向かい、実際古船を参観した。

これで集合時間となり、午前の調査を終え、集合場所の蓬萊閣賓館へ。昼食後は3班に分かれ、午後の調査へと向かった。

蓬萊市内班調査記

学習院大学大学院博士後期課程 福島 恵

蓬萊市内班は、恵多谷雅弘氏(東海大学情報技術センター)とともに、衛星写真や論文から、城壁・市内の河川・古い街のパターンなどの場所を事前にピックアップし、今回の調査対象とした。

まず、宋代以降の府学で、近年整備された戚繼光の故里を見学。続いて、故里の東を通る画河(調査日は水無河)を南に遡り、上水門に到着。清代の県志に記されている3つの小水門が現在も残っていた。ついで、上水門から西方向に歩き、城壁の西南角を調査。現在、旧城壁の再現作業中であった。ここは、唐~清に一貫して街の西南角であった場所で、このすぐ内側は円仁が滞在した開元寺のあった場所である。衛星写真で見たとおりに、この城壁の外側は一段低くなっていた。次は、下水門へ。上水門から城内に入った画河は、途中もう一本の河と合流して、ここから城外へと出る。最近構築された橋が架かっており遺構は存在しなかった。徒歩で7月に発見されたばかりの草橋に向かう。現在は埋め戻された後であった。鐘楼の跡を通過して、先行論文によって渤海館・新羅館跡とされる「前花市弄23」へ。一般住居となっていた。最後に、衛星写真で古い街のパターンが見られた県城北東部へ。聚落の入り口の石碑から、ここは唐代の移民によって形成された「抹直口」という聚落であることが判明。県城からも海岸の堤防からも一段低い窪地で、環境(特に水はけ)の悪い場所であった。ホテルへの帰り道、宜春門(東門)の跡地を通過。今も城壁跡と思われる緩丘陵となっていた。

対朝鮮半島・日本交渉に重要な役割を果たした蓬萊の都市機能の一端を確認することができた。

秦皇島(秦漢建築遺址)調査記

大東文化大学兼任研究員 中村 威也

2007年7月30日より8月1日まで、私と矢沢忠之氏(学習院大・博士後期課程)は秦皇島市に滞在し、渤海沿いの1 老龍頭・山海関、2 秦代建築遺跡を見学・調査した。1は観光地化され容易に行くこともできるので、ここでは2の見学・調査概要を記す。

秦代建築遺跡は、「遼寧綏中県“姜女墳”秦漢建築遺址発掘簡報」(『文物』1986-8)で報告されている秦漢時期の建築跡を含む遺跡である。うち黒山頭遺址は「扎根黒山建功軍営」の敷地となっていて入ることができなかった。建築跡が発見された石碑地遺址は、まさに渤海海岸に位置しており、海岸から数10mしか離れておらず、海水浴客などから保護するために柵がめぐらされており、1人の老管理人が常駐していた。我々は管理人の好意により中に入り、すでに埋め戻されている遺跡を実見し、発掘の説明などを聞くことができた。地元民の管理人によれば、毛沢東を筆頭に各レベルの指導者が遺跡を訪れたとのこと。秦の始皇帝が巡幸した際に祭った碣石だとされているからだろう。遺跡からは複数の基壇や人口建築物跡が確認されているが、瓦、陶器など出土品のほとんどは遼寧省文物考古研究所が発掘後に移送し管理しているため現地には残されていないなど、貴重な情報を聞くことができた。『文物』所載の地図と現地を実見した結果、変化がほとんどないことも確認でき、遺跡の地理的位置とその意義について認識を深められた調査となった。



石碑地遺跡

大連大黒山卑沙城遺跡調査記

学習院大学大学院博士後期課程 矢沢 忠之

本調査は、山東半島と遼東半島をむすぶ海路において遼東半島側の重要拠点である大連を調査することを目的とした。隋・唐期には大連市の北東に位置する大黒山(標高663m)に高句麗の卑沙城と呼ばれる山城が存在した。卑沙城は隋・唐の高句麗遠征の際に山東半島を出発した海軍による攻撃を受けており、高句麗の「千里の長城」の南端であるともされ、この時代の当該海路上の重要拠点であったのである。山東半島の煙台から海路をフェリーに乗り大連へ上陸した我々にまさにふさわしい調査地であった。調査は、2007年8月11日に行われ、参加者は日本・韓国・中国合計15名であった。

卑沙城は「其城四面懸絶、惟西門可上」(『資治通鑑』貞観19年)の記載通り、険峻な岩山に存在し、我々が山上の点将台を目指して登るのも西側からのみ可能であった。我々は午前中に大黒山の東側に位置する観音閣(明清期の寺院)を訪問したが、こちら側からの頂上への道は現在でも存在しなかった。西側から点将台を目指して登り、山上の石鼓寺を訪問。ここには唐王殿と呼ばれる建築物があり唐の太宗が遠征の際訪れたという伝説が残る。

現在見られる卑沙城の城門・城壁などは修復・再現されたものであり当時のものでない。しかし、点将台からの光景は我々にこの山城の歴史地理的価値を理解させるに十分であった。眼下に渤海(金州湾)と黄海(大連湾)が一望できたのである。大黒山以南の遼東半島先端部には大黒山以上の高山は存在せず、高句麗にとって後背地の朝鮮半島への海路を扼する城塞としての価値はまさにここにあったのである。



大黒山卑沙城

2007 年度セクションⅡ 「東アジア海文明のネットワークと環境」 交流ネットワーク班 共同調査の概要

学習院大学文学部准教授 鐘江宏之

【調査地域】能登半島・加賀・越前

【参加者】18名

< 日本 > 鐘江宏之・家永遵嗣・鶴間和幸・馬淵昌也・
畑中彩子・下田誠・大多和朋子・牧飛鳥・福
島恵・小宮山嘉浩・甲斐玄洋・近藤祐介

< 現地協力者 > 小嶋芳孝

< 韓国 > 李文基・禹仁秀・崔弘昭

< 中国 > 楊煜達・韓昭慶

【調査日程】

8月1日(水)

目白駅集合(8:20)→上野駅発(9:32)→越後湯沢駅着
(10:45)→金沢駅着(13:27)→羽咋市歴史民俗資料館
(14:45)→寺家遺跡(15:45)→気多大社(16:00)→福浦津
(17:00)→宿泊

8月2日(木)

ホテル発(8:30)→輪島着(9:15)→白米の千枚田(9:30)→
時国家(10:00)→昼食→揚浜塩田(12:25)→珠洲焼資料館
(13:20)→西芳寺窯跡(14:40)→能登中居鋳物館(15:55)
→七尾市須曾蝦夷穴古墳(17:15)→宿泊

8月3日(金)

ホテル発(8:30)→能登国分寺跡(8:40)→加茂遺跡
(10:40)→昼食→石川県立歴史博物館(13:10)→石川県埋
蔵文化財センター(14:50)→越前吉崎(17:35)→宿泊

8月4日(土)

ホテル発(8:30)→敦賀市立博物館(8:50)→敦賀港(9:40)
→敦賀市立博物館(10:00)→昼食→気比の松原(12:40)→
常宮神社(13:00)→敦賀駅発(15:47)/中国側京都訪問→
東京着(19:06)解散

昨年度は、青森県津軽地方と北海道道南地方での調査を行ったが、今年度は石川県の能登半島から福井県の敦賀までの北陸沿岸地域での調査を実施した。この地域を対象としたのは、本州から海に突き出した能登半島が、海との関わりを深く持っていること、さらに、海を隔てた対岸の渤海との交流を物語る史跡がこの地域に多く分布していることによる。

1日目は能登半島の西岸を巡った。まず羽咋市の寺家遺

跡と気多大社を訪ね、邑知瀨周辺の古代遺跡と日本海沿いの砂丘との関係を知ることができた。次に訪ねた福浦津では渤海使帰還の出発港として利用された入江を実際に踏査し、地形を細かく見ることができた。好天に恵まれて海に沈む夕陽を眺めることもでき、印象深い調査初日となった。

2日目は能登半島北岸から東岸を巡った。まず、半島北岸の曾々木に上時国家と下時国家を訪ね、中・近世に活躍した時国家の立地を学んだ。その後、揚浜塩田で製塩についての理解を深めた。午後は、珠洲市の珠洲焼資料館を訪ね、中世に交易品として搬出された珠洲焼について理解を深め、西芳寺窯跡も見学した。さらに、能登中居鋳物館を訪ね、鉄生産の認識も深めることができた。塩・土器・鉄器はいずれも海によって他地域に運ばれた重要な産品であったという。最後に訪ねた能登島の須曾蝦夷穴古墳では、古代豪族の活動舞台となった海の世界を、眼下に広がる七尾湾の景観から学ぶことができた。

3日目は能登の中心となった七尾から、加賀、さらに越前国境にかけて巡った。能登国分寺と加茂遺跡では、古代の能登・加賀における、地方拠点と交通の問題に関わる史跡を見学した。その後、石川県立歴史博物館において白山信仰の特別展示を見学し、さらに、石川県埋蔵文化財センターにおいて、県内の遺跡の出土遺物、ことに古代の木簡などの出土文字資料を実見した。越前吉崎では、台風による強風の中での踏査となったが、北瀨の湖畔に立地し、大聖寺川を通じて日本海ともつながるその立地を確認することができた。

4日目は越前南端に位置する敦賀で調査を行った。気比神宮、敦賀港を訪ねてその立地を調査し、市立博物館で敦賀港の歴史について学んだ。また、渤海使迎接のために設置された松原客館の推定地を訪ねるとともに、常宮神社にある国宝新羅鐘の調査を行った。

全行程を通して、中国・韓国の研究者に加わっていただき、砂丘に立地する寺家遺跡や、新羅鐘の調査では、相互に刺激的な知見を得て、非常にみのある調査となった。なお、1日目から3日目の石川県埋蔵文化財センターまでの行程で、金沢学院大の小嶋芳孝氏に懇切丁寧なご案内をいただいた。末筆ながら記して謝意とさせていただきます。

吉崎御房調査記

学習院大学大学院博士後期課程 近藤 祐介

2007年8月1日~4日にかけて、北陸地方を中心とした日本海調査を実施した。調査全体の概要については別稿に譲り、本稿では8月3日に行われた吉崎御房の調査についてその概要を述べたいと思う。

吉崎御坊は現在の福井県吉崎町にあり、15世紀後半の本願寺宗主蓮如が中央での弾圧を逃れ、布教の為に移り住んだ際に住房を構えた地である。蓮如とその門徒の集団は小高い丘(吉崎山、通称御山)を切り開き、蓮如の住房(吉崎御房)を築くと同時に、丘下に宿坊や門徒の房を造り、寺内町として成長する基礎を築いたという。こうした発展の背景には吉崎が北潟湖―大聖寺川―日本海へと通じる交通の要衝であったことも見逃せない。吉崎には、戦乱状況をもとめせず北陸を中心に各地から多くの門徒が集まって来たことが当時の史料に記されている。

吉崎の蓮如の住房は16世紀の戦乱により焼失してしまい、以後宗教的な対立などにより再興されることはなく、現在は石碑と石像が残るのみである。そこで今回の調査は15世紀の原像を伝えているといわれる2枚の古絵図のコピーを基に、景観調査に重点をおいて実施された。

調査当日は台風の接近により実施が危ぶまれる場面もあったが、多少の風雨に見舞われた程度で済んだのは幸いであった。

吉崎御坊は小高い丘(吉崎山)の頂上部分を削り取った場所に建てられていたのだが、その敷地の広大さ(約2万

m²)には目をみはるものがあると同時に、その敷地が見事に整地されていることから、15世紀における大規模な土木工事の成果が窺えた。吉崎御坊を取り囲む北潟湖周辺の様子については既に先学での指摘があり、それによると15世紀当時は現在よりも北潟湖湾が大きく入り込んでいたという。実際に周辺を観察するとその指摘が事実である事が良く分かる。特に北側と南東側はそれが顕著であり、当時の吉崎は古絵図にあるように北潟湖湾に突き出すような立地であった事が理解できた。続いて吉崎山周辺の景観に注目すると、対岸や中洲にある島の位置関係などが概ね古絵図に描かれた配置と一致することが確認できた。天気が良ければ日本海はもちろん白山までも望むことが出来るという。日本海から大聖寺川に入り北潟湖へ往来してくる船の動きを把握するのに至便な立地であることが実感できた。また往来してくる船からも丘の上にある荘厳された住房とそこに集まる門徒集団という姿が見えたはずであり、宗教的威容も伴い神秘的な空間を演出していた事だろう。

最後にバスで吉崎周辺を回りながら古絵図にも描かれた春日社を眺め、都市的な場である吉崎の全体像を概観したところで調査を終了した。

短時間の調査ではあったが、先学が指摘している本願寺教団の発達と水陸の交通業者との密接な関係というものを実感する事ができた貴重な調査であった。



吉崎御房本堂跡にて

能登半島・若狭湾共同調査報告 —古代日本と渤海との交流—

慶北大学校講師 崔 弘昭
(チェ・ホンジョ)

交流ネットワーク班主催の2007年度夏期史跡共同調査(8月1日～4日)に、韓国(慶北大学校)側の一員として参加した。今年度の調査地は、石川・富山及び福井の3県を含む北陸地方で、日本海岸最大の半島である能登半島を一周した後、その南側の若狭湾に及ぶ行程であった。旧国名で言うと、能登・加賀・越前に相当する。また、日本最古の海事商法規たる『廻船式目』(鎌倉時代以降順次成立)に登場する、中世の代表的港湾、いわゆる「三津七湊」の内、越前三国・加賀本吉(美川港)・能登輪島に該当する地でもある。そして、日本海に面したこの地域には、中世はおろか古代より、その対岸の大陸との交流の痕跡を示す遺跡が数多く残っていた。

8月1日、初日に見学・調査した場所は、羽咋市歴史民俗資料館・寺家遺跡・気多大社並びに福浦津である。寺家遺跡は、気多大社のある海岸段丘の下に位置し、縄文前期から室町時代にわたる遺構・遺物が検出されているが、古墳時代末以降のものでは、特に祭祀関連の遺物が多数出土している。寺家遺跡と気多大社で行われた主要行事の中には、海を渡る前の渤海使の帰国の安全を祈る祭祀と、これらの異邦人が齎したと思われる災厄等の、蕃神(異国の神)の災を防ぐための祭祀が存在したことが推測された。気多大社は『延喜式神名帳』(927年完成)に記載される式内社で、8世紀末から9世紀にかけて、とりわけその神格が急激に上昇した。

渤海は、727(神亀4)年、日本への最初の遣使をして以来、919(延喜19)年までに、33~35回(回数は研究者の説により異なる)の使者を派遣することにより、約200年間にわたり日本との交流を持続していた。日本からも渤海に13回の使者を派遣したが、811(弘仁2)年の遣渤海使が最後となった。従って、後半の100年間の両国間の交流は、渤海使の来日によってのみ維持されていた。後期の交流では、主に交易が中心となっていった。渤海使の来日において、その到着地が判るのは全部で30回、そのうち北陸地方が11回を占め、能登に3回、加賀に3回という。渤海使は、727年に出羽国に初来日して以来、日本

海沿岸各地に到着したようである。

初日の最後に訪ねた福浦津は、能登国の福良泊(ふくらのとまり)と呼ばれた良港で、特に、渤海使の発着地として広く知られた場所であった。『日本三代實録』「元慶七年條」(883年)によれば、この地の大木の伐採が禁じられたという。それは、渤海船を建造、修理するために、樹木が多く必要とされたためであった。また、『日本後紀』「延暦二十三年條」(804年)には、能登に到着する渤海使が多いため、宿泊や接待を疎かにすることなきようにするため、「客院」を設けるとする記事が見られる。この「能登客院」の設置場所として福良泊が比定されることもあり、あるいはこれには疑問を呈する向きもある。しかしながら、福浦津が渤海使の帰国船が出帆する港であり、かつ造船基地として重視されたことは疑いのないことである。

一行は、8月2日～3日には、輪島・珠洲・七尾・金沢・吉崎を巡り、古代・中世期の各種の遺跡や、博物館・資料館等を調査、見学した後、最終日の4日には、敦賀にて調査を行った。敦賀もまた、古代から中世に至るまで、日本海沿岸を代表する港としての繁栄を享受してきた。敦賀市博物館・気比神宮・気比の松原・常宮神社等の地を順に見て回った。渤海使臣を迎えるための施設は、この敦賀にも設置されていた。「松原客館」がそれである。しかし、919(延喜19)年、渤海からの最後の使節150人が若狭に到着した際に、その受容に問題が生じ、越前国司が朝廷から詰責を受けた記録(『扶桑略記』)が見えることに鑑み、この時分には、「松原客館」が既に衰退しつつあることを推測できる。「松原客館」の管理を預かり、海洋神を祀る気比神宮もまた、遣唐使の海上での安全の祈願を挙行する等、朝廷の手厚い保護を受けていた。

渤海には外国へ通じる道は五つあるとされ、その一つが「日本道」と呼ばれた海の道であった。この海路を通じ、日本と渤海との活発な交流が遂げられていた。能登半島と若狭湾周辺地域は、大陸からの新しい情報と人と物を受け入れる海の「玄関」であり、また「迎賓館」でもあったのだ。(翻訳: 大多和朋子)

能登半島考察随想

復旦大学中国歴史地理研究所講師 楊 焜 達

2007年8月1日から4日まで、私と韓昭慶副教授は縁あって、日本の学習院大学鶴間和幸教授を代表とする、能登半島調査に参加することができた。これは私にとって忘れ難い体験である。

能登半島は本州北部に位置し、海を隔てて朝鮮半島やロシアの沿海州と相い望む。四日の行程中、私たちは前後して、一連の古代沿海文明および海上交通関連遺跡を調査した。例えば、寺家遺跡・福浦津・時国家・珠洲焼窯址・蝦夷穴古墳・加賀遺跡などである。小嶋教授の解説、馬淵教授・下田氏・福島氏による通訳と説明のおかげで、これらの遺跡にまつわる問題に対し、一定の見地を得ることができた。

日本列島や朝鮮半島・ウスリー江以東の沿海地域では、古代、海上交流が頻繁に行われていた。この交流は当該地域の文明のプロセスに対して、多大な影響をもたらしたのだった。平安時代、日本の国家は高句麗などとの交流を発展させるため、わざわざ都から能登半島一帯へ通ずる駅道・駅体系の整備まで行ったのである。中世には、当地の焼物技術と大陸の影響を受けた須恵器の技術を受け継いだ陶器、「珠洲焼」も日本沿海住民にもはやされる商品となった。そして商業の発展は、海上運輸業者の宗教信仰の発展にもつながることになったのである。これらのことは、日本の歴史に対して初歩的な知識しか持たない私にとっては、全てが新鮮な認識であった。

渤海国と日本の交流、とりわけ金代ウスリー江一帯の地方政権と日本との交流は、私にとって更なる関心事となった。私の研究分野は西南辺境史である。中国辺境史の研究者は、これまで王朝側の角度から辺境を俯瞰することを宗としてきており、辺境と周辺地区との複雑な政治・経済の連係については、ほとんど考慮することはなかった。これは認識を改めねばなるまい。

また、13世紀以降においてはモンゴルの興起にともない、ウスリー江地域と日本列島との国家間による正式な往來の記録はほぼ途絶えることとなった。このような現象の原因も、探求する価値を有する問題である。政治的・社会的理由以外に、敏感な高緯度地域としては、気候の変化が影響の要素を作り出すこともあったのだろうか。これはより踏み込んだ探求を要する問題かも知れない。

調査における、鶴間教授・家永教授・鐘江准教授を始めとする日本の研究者の、真摯で精緻な探求精神と活動の姿勢もまた、私の学習にとって有益なものであった。韓国の李教授・禹教授および崔弘昭氏などの研究者とも友好を結ぶことができた。これらのことは私の今後の研究にとって、よい作用を生み出すことになるだろう。日本の中国史研究には深い伝統がある。機会があれば、更に日本の研究者から学びたいと思う。

(翻訳：青木俊介)



福浦津を望む



重要文化財 とくくにけ 時国家

寺家遺跡の啓示

復旦大学歴史地理研究中心副教授 韓 昭 慶

2007年8月1日～4日に、私は当研究所の楊煜達氏と日本の学習院大学文学部鶴間和幸教授、韓国の慶北大学校師範大学の李文基教授等12名の学者、6名の学習院大学大学院の学生と共同で日本の能登半島を調査した。最後の一日に韓国側の学者の希望により常宮神社を調査した外は、全体の行程は当初の予定どおりだった。調査の対象は主に遺跡と博物館である。調査時には、全員が調査の対象の簡単な紹介及び背景の紹介と地図に関する冊子を持っていたが、残念なことにすべて日本語で、日本語の分からない私はその中に混じる漢字による不確かな知識しか得られなかった。しかし、幸いなことに調査全体を通して学習院大学の馬淵昌也教授・下田誠氏・福島恵氏の助けを得て、調査の目的と内容について初歩的な理解を得ることができた。今回の調査の中で、私は寺家遺跡の変遷に興味を惹かれた。帰国後には、金沢学院大学の小嶋芳孝教授のご協力により、寺家遺跡に関連する研究を送っていただいた。

寺家遺跡は平安時代(794-1185年)と室町時代(1392-1573年)にかつて二度に渡ってかなり大規模な流砂の侵襲を受けており⁽¹⁾、このことは流砂の移動と海面の上昇及び地殻運動と海岸防砂林の伐採と関係がある⁽²⁾。この論文は、平安時代中期は関連文献の記載により気候が比較的温暖な時期であり、そのために平安海進の現象すなわち海面の上昇があったことにも言及している。

我々が中国の文献記載及び関連研究と結びつければ、中国でも対応する証拠を見つけることができる。当研究所の満志敏教授は、かつて歴史文献中の暖冬現象に関する記載を利用して、北宋(960-1126年)の統治の大部分の時期は、気候が温暖であったことを論証した⁽³⁾。気温の上昇に従って海面も次第に上昇して、さらに太湖地区の水文環境に影響を与えたのである。彼は別の論文の中で以下のように指摘している。北宋に始まった海面上昇は河流を上昇させて基準面を浸食させた。このことが呉淞江の水流に対して、下降減少に比して、さらに多くの曲流を発生させ、流速の緩慢化を生じさせた。まさにこの変化こそが黄浦江水系の発達を引き起こし、最終的に黄浦江水系が呉淞江水系に取って代わることを招いた。今日の太湖流域が東に排水する主要な道筋になった原因なのである⁽⁴⁾。

これらの比較から、我々は少なくとも二つの情報を得ることができる。

- 一、異なる文化背景及び異なる国家の資料を利用して10-12世紀に温暖期が存在することを論証できることである。
- 二、海面の上昇が異なる地域において与えた影響は共通性を持ちながらも異なる点があることである。

これより分かるのは、異なる国家間で歴史時期の海面上昇及びその影響に関する合同研究を展開することは、注目すべき価値あるものであるということである。なぜならば、海面上昇の影響は世界(global)範囲であり、地方(local)現象ではないからである。(翻訳:矢沢忠之)

- (1) 王培新「日本石川県寺家遺址在渤海交流中的位置」『北方文物』1995年第2期
- (2) 石川県羽咋市教育委員会編「寺家遺跡」第14-18次発掘調査報告書;小嶋芳孝「砂丘と人間」『考古学と移住・移動』1985年
- (3) 満志敏「黄淮海平原北宋至元中葉的氣候冷暖状況」『歴史地理』第11輯,上海人民出版社、1993年6月
- (4) 満志敏「黄浦江水系形成原因述要」『復旦学報』(社会科学版)1997年第6期



寺家遺跡にて

雲南省調査記

学習院大学大学院博士後期課程 野本 敬

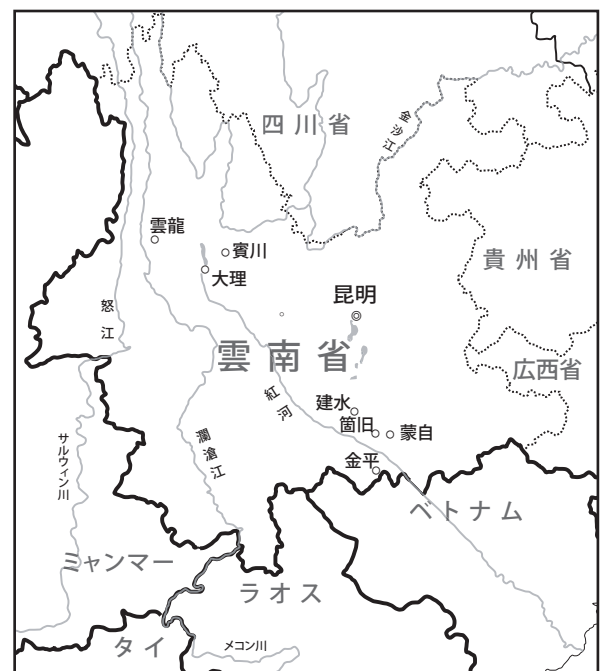
2007年6月20日~7月19日の約一ヶ月間、武内房司教授(学習院大学)と楊偉兵副教授(復旦大学歴史地理研究中心)、野本の三名は共同で雲南省における近代史・生態環境史に関する実地調査を行った。調査地は雲南省南部の紅河ハニ族彝族自治州、および雲南省西部の大理白族自治州である。今回は、雲南省の社会・経済・環境を大きく改変する要因となった鉱工業・交通ネットワーク・陸路移民に重点をおき、関連する旧跡の踏査および聞き取りを行うとともに、史料として利用可能な文字資料の収集をはかることとした。

以下大要を記すと、まず6月22日に雲南大学で武内教授が講演を行い、雲南大学歴史系の教授陣と交流するとともに情報の収集を行った。翌23日から紅河ハニ族彝族自治州へ移動し、19世紀末に対外貿易窓口としていち早く開放され、フランス税関が置かれた蒙自県において、明代軍事拠点跡や兵士墓群、商人の会館跡などの旧跡、また近代の碧色寨鉄道駅などを参観し、同時に多くの碑文を採録した。次いで25・26日は、近代以降現在まで錫の生産で名高い箇旧市にて、箇碧石鉄道駅の旧跡・雲錫公司博物館を参観し、現地の文化関係者から聞き取りを行うとともに、市の図書館地方文献室にて資料を閲覧した。27日にベトナム国境に面する金平県へ出発、途中の蔓耗船着場跡では往時の河川交通の様子について聞き取りを行い、金属の交易と地元の定期市とで利用する埠頭が異なっていたことなどを知った。28日は資料収集組とタイ族村落視察組に分かれて行動し、それぞれ文献資料やベトナム側との往来や通婚状況などについて一定の収穫・理解を得、この日のうちに建水県に移動した。建水県は雲南省南部の主要都市で、多くの人材を輩出したところであり、かつて錫鉱山で財を為した朱氏・張氏など大家族の邸宅を参観した。30日に昆明へ戻り、古書街などで更に資料を収集・購入した。

大理白族自治州へ向け出発したのは7月2日で、翌3日に賓川県に入り、現地の水利施設「地龍」を視察した。「地龍」は雲南には珍しい暗渠であり、賓川県が慢性的な水不足地域であるところに発達の要因があると考えられる。今回は初歩的踏査にとどまったが、これまでほとんど研究

がなされていないこともあり、今後より詳細な調査が期待される。4日には現地の橋梁碑4点を採録した。6日には塩井による塩生産で栄えた雲龍県へ移動し、翌7日、かつてチベット、ビルマ方面にまで塩の隊商が行き来した「塩馬古道」を歩きつづ、白石鎮順蕩村にて楊氏宗族墓地、大慈寺墓群、橋梁群を参観、碑文の採録などを行った。8日は塩井の所在地である師井・諾鄧を訪問し、以前の塩生産と交易について理解を得た。9日は宝豊鎮へ赴き、近代の知識人である董澤邸宅及び塩交易で栄えた市街を見学し、附近山頂の太和寺にて碑文を採録した。11日に雲南西部のかつての中心都市・大理鎮に入り、西雲書院跡(現・大理一中)、カトリック教会などを参観し、12日に昆明に戻った。さらに昆明や上海の図書館などで資料収集を行い、最終的に7月19日に帰国した。

今回上記以外の資料収集における成果は、まず会館・鉱山関連碑や塩井関連の墓碑や橋梁碑など、新発見のものを含め27点の碑文資料を採録できたことである。文献資料についても現地で編纂された資料や族譜など多数を入手することができた。その後図書館で収集したものを含めると更にその数は増える。今回収集した資料は、いずれも従来不明瞭な部分の大きい雲南の在地基層社会の実態を物語る史料であり、今後整理・分析に取り掛かる予定である。



今回の調査は単発ではなく、今後の追加調査や国際共同研究として大いに可能性の持てるものである。今後の予定としてはまず2008年8月に、中国・日本はじめ西南中国の生態環境史研究者が一堂に会する国際会議が予定されている。

最後に、今回の調査は楊副教授が担当する中国国家自然科学基金項目「雲貴高原土地利用と人文駆動要素変化研究(1659—1960)」(批准番号40601024)によってはじめて実現したものである。氏の尽力と現地関係各位の協力に対し、心から謝意を表して筆を擱くこととしたい。



紅河

水中考古学実習参加記

学習院大学大学院博士後期課程 河野剛彦

去る2007年8月19日から21日にかけて、「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクトの一環として、西伊豆の土肥にて水中考古学の基礎的技術習得を目的とした実習が行われた。参加者は鶴間和幸教授ご夫妻、大学院生4人、学外参加者一人という構成であった。

本実習は、「東アジア海文明の歴史と環境」プロジェクトを推進していく上で、海中環境に対する見識を深め、水中活動の基礎的技術を習得することを主旨とするものであった。一言で「海」と言っても、海上と海中ではその環境は全く異なったものである。地球温暖化の影響により海水面の上昇が懸念される昨今の状況下において、海上や海辺に存在する史跡や遺物の置かれた環境が、海中環境へ変化するという可能性が十二分に考えられ、水中考古学の重要性は今後高まる一方であると考えられる。この点において、本実習の目的は非常に意義深いものであると言えよう。

実習は、ダイビング器具の名称や扱いについてのレクチャーを皮切りに、プールでの装備の着脱、水深のあるプール(4メートル)での潜水練習等を行った後、海中での活動に移った。ダイビング機材一式はかなりの重量であり、陸上では行動に不自由が生じる程だったが、水中では不自由なく行動できた。また、今回の実習では水深18メートルまで潜水を行ったが、潜行に伴い体にかかる水圧が増してゆく様子ははっきりと感じられた。浮力に伴う重量感の齟齬、水圧の影響といった要素は水中環境独特のものであり、これらの陸上環境との相違は、水中で研究活動を行う際に留意すべき点だろう。

以上のように、「水深18メートル」という環境を言葉だけでなく、実際に目撃し、体験できたことは今回の実習の最大の収穫と言える。中国沿岸、特に今後の調査対象と目されている渤海湾は最深でも水深36メートル程であり、我々が潜水技術の向上を心掛ければ十分に到達し得る深度である。ただし、渤海湾の環境悪化がかなり深刻な状況であるとの情報もあり一抹の不安を禁じ得ない。今後、潜水技術の向上、水中環境に対する知識の充実はもとより、水中考古学についての学習機会も必要となってくるだろう。

末筆となったが、本実習のインストラクターを務めて下さった、ハワーズワークスの藤村俊二氏、イワシダイバーズの小松栄氏に、この場を借りて御礼を申し上げ、本報告の結びとしたい。



実習中の風景

韓国史跡参観記

早稲田大学高等学院教諭 濱川 栄

今回の韓国滞在(2007年8月14日~8月31日)中、以下の3史跡を訪れる機会を得た。

1. 慶州(8月21日)

参加者: 濱川栄、村松弘一、大川裕子

大邱からタクシーに乗り、1時間ほどで慶州に到着。蔚山から来てくださった金青子氏(禹仁秀先生の元教え子)に一日日本語で案内していただく。慶州博物館、雁鴨池、大陵苑、石窟庵、仏国寺と参観したが、個人的には新羅諸王の王陵群が集中している大陵苑が興味深かった。近年の整備によるものではあるが、高さ10m~20mほどの各陵墓が美しく刈り揃えられた緑の芝に覆われ、雲のほとんどない晴天とコントラストをなす光景は、猛暑に疲れた我々にさえ非常に爽快感を抱かせるものであった。世界遺産である石窟庵の仏像や仏国寺の伽藍群もきれいに整備され、かといって最近の中国の史跡のように過剰な装飾で覆われることもなく、一般観光客の目を楽しませつつ、専門家の批判的目線にも十分耐えられるような配慮の行き届いた展示になっていた。

2. 伽耶山海印寺(8月22日)

参加者: 濱川栄、村松弘一、大川裕子、禹仁秀、李相勲、金知恩(禹仁秀先生の院生)

午後、禹仁秀先生の研究室で海印寺を紹介したビデオを拝見したあと、2時ごろ禹先生と李相勲氏の運転する乗用車2台に分乗して現地に向かう。安全運転で2時間ほど

かけて到着。山中のため、日頃の大邱市内の猛暑に比べるとかなり涼しく感じられる。寺院内は各所が工事中であったが、肝心の八万大蔵経を収めた校倉作りの倉庫は見学可能であった(ただし建物内には立ち入り禁止)。13世紀にモンゴル軍退散を祈願して作られたものだが、この版木から印刷された大蔵経は、室町時代に日本にも持ち込まれ、増上寺(東京都)と大谷大学(京都市)にほぼ完備したものがあるといふ。「東アジア海文明」という概念を掲げるならば、仏教こそはその形成に最も重要な役割を果たした要素として挙げなければならないのではなかろうか。

3. 安東(8月25日)

参加者: 濱川栄、大川裕子、李相勲。

安東市内外の史跡のいくつかを、同市に実家がある李相勲氏に車で案内してもらおう。映湖楼、安東ダム近くの古住居群(ただしKBSドラマの撮影のために復元されたもの)、河回村、仮面博物館、屏山書院を参観。朝鮮王朝時代の両班と庶民の住居がほぼそのまま保存され、今も人々が生活している河回村がやはり興味深かった。この日も晴天で非常に暑く、河回村内の散策は熱中症一步手前という厳しさだったが、近接し相互に依存して暮らしながらも厳然とした身分差が保たれた朝鮮王朝時代の両班と庶民の日常生活がかいま見られ、非常に興味深かった。韓流スターのリュウ・シオン(柳時元)の実家もあり、また韓国の夏休み最後の日でもあったため、観光バスで乗りつける家族連れも多く、猛暑の中大変な盛況であった。



大蔵経倉庫前



慶州・大王苑

慶北大学校中央図書館古書室および展示室の調査

学習院大学東洋文化研究所助教 村松弘一

慶北大学校は、1923年に開学した大邱師範学校から数えて、80年をこえる伝統ある大学である。学習院同様、古い書籍を有している。慶北大学校中央図書館の五階に古書室があり、そこに図書館所蔵の線装本が収められている。今回の訪韓では、この古籍室の所蔵を時間の許すかぎり調査した。刊行された目録はないが、大学関係者を通じて古書室の閲覧室にお願いしたところ、内部資料である『古書目録』三冊を閲覧することができた(以降、『古書目録』1,2,3と称す)。『古書目録』1(2005年1月発行)は30,006冊が収められており、全体は一般古書と貴重本に分かれている。貴重書には「貴重古書」「準貴重古書」「牧山文庫貴重古書」「牧山文庫準貴重古書」「遠志齋文庫貴重古書」「遠志齋準貴重古書」がある。『古書目録』2は2005年12月刊行のもので、10218冊が収められている。内容は北齋文庫・遠志齋文庫・雲川文庫・博物館・菊泉文庫・마름文庫・白旻文庫・一中文庫・梧園文庫に分けてまとめられている。『古書目録』3は2006年12月に刊行されたもので8260冊の書誌情報が収められている。この中には、牧山文庫・友弦書樓・研中堂文庫が収録されている。

今回は、貴重書扱いとなっている史書をいくつか出納していただいた。本来であれば、一般の閲覧には応じていないが、今回は朴賛植氏に特別に許可をいただいて閲覧した。一部の書誌情報を以下に記す。

①史漢一統 古準貴 952.3 사 91 木活字本(訓練都監字)

[刊年不明] 零本1冊

四周雙辺 10行 17字 30.5 × 20.5cm

所蔵: 卷10(匈奴列伝・平準書・答任安書)

訓練都監字と呼ばれる木活字の書。17世紀前半(1603-1634年?)に刊行されたと考えられる。

②漢書 古北貴 812.3 반 15 ㄱ 金属活字本(初鑄甲寅字)

[刊年不明] 零本1冊

四周雙辺 10行 17字 32.6 × 21.2cm

所蔵: 卷65-67(東方朔伝・公孫劉田王楊際陳鄭伝・楊胡朱梅云伝)

初鑄甲寅字と呼ばれる金属活字本。1434年以後刊行。「北齋文庫」印および2つの印あり。

③漢書 古準貴 952.3 반 15 ㄱ 金属活字本(顯宗実録字)

[刊年不明][刊行地不明]1677-100 卷35冊

左右雙辺 10行 19字 32.3 × 19.7cm

所蔵: 完本

印記: 孟仲明蔵 大邱師範大学

顯宗実録字と呼ばれる金属活字による刊本。1677年以降に刊行された。

「吳興後学凌稚隆輯校」とあり。

④史記 古遠 952.01 사 31 ㄱ 木版本

[刊年不明] 零本4冊

左右雙辺 9行 20字 25.6 × 15.7cm

所蔵: 卷21-22、46-47、57-62、119-122

中国大陸の刊本。

「華亭 徐孚遠・陳子龍測議」とし、上部欄外に二名の注釈あり。「遠志齋文庫」印、「崔文庫」印あり。

【展示室】

古書室の左手には展示室があり、その展示は慶北大学校の所蔵する古籍を通じて、韓国書誌学を通覧できるようになっている。入り口を入れて左右には冊板がならべられ、柳成龍(1542-1607)のものもある。左手には初鑄甲寅字(1434年)から六鑄丁酉字(1777年)までの金属活字による刊本が時代を追って展示されている(『近思録』ほか)。左手奥には中国木板本も展示されている(『資治通鑑』零本45冊、『周易大全』零本3冊、『韻府群正』零本5冊)。さらに、奥には『紺紙金泥妙法蓮華經』『麻紙銀泥大佛頂如来蜜因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』(高麗恭愍王五年、宝物271号、実物は金庫にあり)の複製版がある。その右には李退溪『梅花詩』や『救荒撮要』(明宗)がある。その右には活字版付属具として活字等がならぶ。右手奥には医学書がならび、『増補萬病回春』(活字本(韓構本))のほか、『東醫寶鑑』があり、「歳甲戌仲冬内醫院校正完宮重刊」「歳己亥仲秋内醫院校正嶺宮開刊」の刊記が並べられている。その右には思想・天文・地理等の書がならぶ(『輿載撮要』など)。また、「奎章之寶」印のある『御定杜陸千選』も展示されている(翠菴文庫)。



古書室の入り口



展示室

慶北大学校博物館所蔵 楽浪関係遺物について

日本学術振興会特別研究員 大川 裕子

慶北大学校博物館は、1959年の設立以来、大学博物館として韓国で初めて発掘調査を主催するなど、現在に至るまで多くの成果をあげている。博物館には、先史時代から現代に至る考古出土品や民俗関係の資料が所蔵されており、屋外には各地から収集した石刻資料が博物館を取り囲むように展示されている。

慶北大学校博物館には、漢の楽浪郡故地から出土した遺物が数点収蔵されている（『慶北大学校博物館所蔵遺物図録』2003年参照）。これらは、総督府時代に小倉武之助、杉原長太郎、白神寿吉などの日本人収集家が所蔵していたが、戦後、旧大邱府立博物館の収蔵を経て、慶北大学博物館に移管された品々である。

楽浪関係遺物には彩絵土器、緑釉勺、青銅博山炉、五銖銭のほか、「永和九年三月十日遼東韓玄菟太守領修利造」の銘文をもつ墓磚がある。この墓磚は、1932年、平壤駅構内工事中に見つかった磚室墓に使用されていた複数の紀年磚の一つで、ソウルの国立中央博物館にも同墓出土の銘文磚が収蔵されている（国立中央博物館編『楽浪』2001年）。この墓磚は、紀年のもつ特異性ゆえに見当時から注目を集めており、梅原末治『楽浪帯方郡時代紀年銘磚録集』（『昭和七年度古蹟調査報告第一冊』）や小田省吾「平壤出土永和九年玄菟太守に関する一考察」（『青丘学叢』9、1932年）による報告・研究をはじめとして、これまでも多くの論文に引用され、言及がなされている（例えば孔

錫龜「平安・黄海道地方出土 紀年銘磚에 대한 研究」『震檀學報』65、1988年）。

墓磚にある「永和」とは東晋穆帝の年号である。楽浪郡は、313年に高句麗美川王に滅ぼされたため、この墓が造営された永和九年（353）にはすでに存在していない。また、「遼東韓玄菟太守」の官職名にみえる遼東郡や玄菟郡の地は、当時、鮮卑族の前燕の領土となっていた。つまり、この墓磚は、楽浪滅亡後40年たった後も、故楽浪郡の故地にその遺民が居住し、高句麗や華北の一部を支配した前燕と反駁しながら、江南の東晋との何らかの関係を保っていた可能性を示す重要な資料である。そして、陸路を分断された故楽浪の地と江南の東晋を結んでいたのは、渤海湾を通じた海の道であった。



慶北大学校博物館

2007 年度学習院大学アジア研究教育拠点事業 報告会・座談会筆記録（後編）

第2部 東アジア海を渡った人・モノ

司会（鶴間和幸） 我々さらに見ていきたいのは、さらに海や港を調査するというのもあるのですが、そこからどういうものが出てきているのかということは、実は最終年度に展覧会をやりたいと考えて少しずつ動き出しているのです。例えば、志苔館等で見たと、日本の港には30万ほどの大量の銅銭が大きなかめに入って出て来たりしていますよね。そういう中国の銅銭とか、あるいは十三湊の歴史民俗資料館でもちょっと見かけましたけれど、陶磁器が出土している、それから、そのほか、日本の港でどういう大陸の物が出土しているのか、それから中国の側でどういう物が出てきているのか。

1つ、最近こういう話が出てきたのですが、中国の国家博物館は旧歴史博物館ですが、もともと水中考古学を非常に積極的に行っていて、渤海は非常に浅い海ですから、渤海沿岸に沈んだ船を発掘しているのです。最近では福建省の東海平潭というところから陶磁器が大量に出てきて報告書が出ています。どうなるかわからないのですが、そういうものを日本の大学関係の場所で貸し出して展示してもいいという話を向こう側がしています。それは水中考古学の成果で、我々は全く陶磁器に関しては素人ですけども、そういうことも視野に入れていっていいのかなど。

それ以外に、東アジアの海の文明を考えるものとして、どういうものに注目していったらいいのか、その辺も現地を歩いて、何か感じたことがあれば聞いておきたいのですけれど。

例えば、我々が沖縄に行ったときに、あそこに夜光貝でつくったさじが展示されていました。夜光貝も展示されていましたね。我々、大邱の博物館に行きましたら、沖縄産の夜行貝でつくったさじが展示されていて、これは沖縄産と書いてありました。朝鮮半島では、螺鈿に貝を使うのですけれど、古い時代は日本、沖縄から運ばれた夜行貝が使われていたようですが、そういう物も恐らく研究はあるのでしょうかけれども、注目していいのかなということを感じながら見ていました。

下田誠 十三湊で見ました陶磁器ですけど、遺物整理室には青磁とか白磁が管理されていて、ともに珠洲焼も整理されています。それが当時の編年に役立っているというのを聞き、私自身は非常に興味深かったもので、今回、能登に行けるということを楽しみにしているのです。

先日、鐘江先生がおっしゃっていたことですが、そういった珠洲焼とかが中国や韓国にどのぐらい行っていたのか、僕は「青磁と白磁が来ている」という方を考えていましたけれど、「日本の物があちらに広がっている」という可能性もあるかもしれません。そういうことを全体的に見ていくとおもしろいのではないかな。

司会 東大の東文研の羽田正先生と話をしていましたから、羽田先生も海域の問題に大変関心を持って泉州にも行かれたということで、「中国からそれだけ物が来ているのに、逆に日本から中国に行っている物がいないというのは絶対おかしい」と言うのです。江戸時代、日本の海産物が中国に運ばれましたけれども、本当はないのかどうか、一方通行なのか。沿海地域をとってみると、中国のそういうところに日本の物が運ばれているということが本当はないのかどうか、その辺、どうなのでしょう。

村松弘一 去年のシンポジウムでも葛剣雄先生は、「地中海文明はローマがあり、さらにその対岸にエジプトがあって、お互いが交流している歴史があるが、それに対して東アジア海というのは中国が断トツに上にあって、そこから文化が流れていくだけではないか」、そんなふうな感じで言われて、さらに同じことを藤田高夫先生もまとめるときにおっしゃっていました。本当にそうなのでしょう。

鐘江宏之 日本と中国の間だけでなくいいと思うのです。新羅と中国の双方向は恐らくあるわけですよ。双方向があればそこを經由して日本と中国の間を移動する物だって当然出てくるわけで、そういう視野は常に考えておく必要があると思います。直接という場合を追いかけられているので見つからないだけかもしれません。先入観で見落としている可能性はなくはないと思いますし、そういうことをみんな追いかけしていないのではないですかね。

武内房司 さきほどの交流の話ですが、具体的にどういうものをイメージされているのでしょうか。商品だったら幾らでも中国に流れていますよね。

司会 例えば、どういう物？

武内 例えば、コショウは東南アジアから流れていますし、海産物、ナマコなんていうのは中国が最大の消費国です。しかも沿海地域ではなくて、むしろ消費地は内陸だったらいいですね、重慶とか。海のある物を必要としているのは沿海ではなくて内陸なんです。パセドー氏病のように微量元素の不足の問題が出てきますので、生きるためには海のある物が必要になるわけですが、そういう意味で、相互に支え合いながら生きてきた東アジアの歴史もあったのではないかと思うのですけれどね。

司会 例えばナマコとかフカヒレですよ、ああいうものが江戸時代に日本から中国に入って、それがどう普及したかという研究というのはあるのですか。

武内 中国の資料がないからなかなか難しいのですが、鶴見良行さんの本なんかを読むと、内陸の方が重要度があつたようです。塩の問題でも、岩塩のようなものでは補えない要素、非常に微量だけれども欠かすことができない物とかあつたわけで、内陸と海との相互依存関係というのを考えないといけないのではないのでしょうか。そういう面からも日本、朝鮮、東南アジアの関係を捉えていくことが必要だと思います。

司会 中国史の中で、明清時代は内陸と海辺というか、中国側の沿海地域との交流という、そういう視点というのは研究者にあるのですか。

武内 これまで弱かったですよね。

司会 ほかに、物として思い浮かぶものはなかなかないのですが、例えば、中国の沿海のいろいろな博物館がありますけれども、少しそういうところをチェックしてみるといいかもしれませんね。

菅野恵美 船のいかりとかは。

司会 運河でも運河で沈んだ船というのが結構展示されていたり。

菅野 ああ、でもそれ多分、運河の碇石という石の物ぐらいしか残っていないみたいですね。大きさから多分船の大きさがわかるので重要みたいです。

村松 在唐新羅人は、海港だけではなくて運河沿いに揚州とか楚州(現在の淮陰)というところにもいたという記載があつたりします。そこでは陶磁器などの遺物が発

見されています。そうやって見れば、港を介して、さらにその内陸部まで朝鮮半島の人々、日本人が入ってきたわけですね。

福島恵 先ほど東南アジアという話があつたのですが、北から見ると、セイウチの牙がオホーツクから、結構中国の方に入っていて、中国でかなり象牙に似ている物らしくて珍重されたという研究が北海道大学を退官された菊池俊彦先生のご研究にあります。

司会 それこそ象牙とか寶貝などというのは、海からしか行きようがないですから、雲南などで随分発見されていますし、日本も南西諸島ぐらまで視野に入ると、そういう物が入っていることはあり得ますね。新安沖の沈没船、あそこにも日本人が乗船していた、将棋の駒が出てきたり、日本人の名前か何か出てきていますよね。そういう商業船になぜ日本人が乗っていたのですかね。

それから、それこそ西安で井真成のああいう墓誌がいきなり発見されて、日本人が長安に入っていたということがわかるわけですよ。ああいう発見というのは、これから注目すればあるかもしれない。あるいは探し出していけるかもしれない。まあ、そういう問題もちょっと置いておきましょうかね。

* 本稿は 2007 年 4 月 26 日に学習院大学において開催された 2007 年度学習院大学アジア研究教育拠点事業報告会・座談会の内容の一部を編集したものです。

研究交流報告

学習院大学外国語教育研究センター教授 高柳 信夫

8月27~31日の韓国訪問の途中、本拠点事業の韓国側の相手校である大邱の慶北大学校をたずね、8月28日15時より、同校の愚堂教育館101号室において、本学教職課程の諏訪哲郎教授と高柳が講演を行った(参加者は教員、院生、学生など約100名)。講演題目は、諏訪教授が「国際化時代における日本の地理教育」、高柳は「近代中国における進化論の導入—嚴復(1854~1921)を一例として」、その内容の概略は以下の通りである。

諏訪教授の講演では、所謂「ゆとり教育」導入前と後の中学校社会科教科書の記述内容の比較を通して、近年の日本の地理教育の問題点が指摘された。それは、「ゆとり教育」以前の日本の地理教育においては、世界各地域について満遍なく学び、世界の全体像を把握する学習がなされていたのに対し、「ゆとり教育」の導入とともに、教育の基本方針が「知識伝達型」から「自己主導的学習重視」へ転換してゆくと、地理教育においては「重点地域中心の学習」が主流となり、結果として、基本的知識を持たず、世界の全体像すらイメージできない生徒が大量に生み出されてしまったという点である。そして、今後の世界において最も必要とされる「自ら課題を発見し、問題を解決してゆ

く能力」を身につけるには、世界についての基礎的知識こそが不可欠であり、日本の現状は改革されねばならないと論じられ、同時に、韓国は日本の教育改革の「轍」を踏まぬことが肝要であるとの提言がなされた。

一方、高柳の講演では、近代中国の思想世界において大きな役割を果たした進化論について、その先駆者である嚴復を中心として紹介がなされた。特に、(1)ヨーロッパと異なり、進化論が中国では大きな反発を生まなかったのは、『易』や朱子学に代表される中国伝統思想と進化論との間に一定の親和性があったことが一因と考えられる(2)同じく「社会ダーウィニズム」といわれながら、嚴復の考え方や欧米流の考え方には正反対とも言える部分が見られるが、これは進化論を受け止める側の歴史的・文化的文脈に依るものが大きく、どちらか一方が「誤り」であるとは言えない、といったことなどが述べられた。

講演は日本語で行われたが、予め詳細な原稿の韓国語訳が参加者に配布されており、講演後の質疑応答は予定時間を越えて18時15分まで行われ、非常に有意義な意見交換の機会が得られた。

随想

2007年東アジア海文明黄河班調査に参加して

復旦大学大学院博士課程 李向韜

2007年8月14日から18日の間、黄河班は河北省滄州地区において十数カ所の前漢故城、黄河故道及び堤防施設遺跡の調査を行い、非常な成功を収めた。これには次のいくつかの点が有益であった。

1. 計画が周到に立てられていた。出発前に各方面と協力して、毎日の調査内容、食事、宿泊と車の手配等、詳細な調査計画を策定した。

2. 河北文物局の協力を得ることができた。滄州市文物局が管轄下の各県と郷に指示し、地元政府の関係者と専門家を積極的に我々の行動に付き添わせてくれた。これにより調査目的を最大限に達成できたばかりでなく、計画外の非常に有意義な文物を見ることができた。

3. 行程と宿泊を重視した。地元の運転手と車を手配したので、調査時間を大幅に節約でき、調査の途中でも休息しながら議論をすることができた。同様に、経費内で比較的良好なホテルを選び、翌日の調査の英気を養うことができた。(翻訳:市来弘志)

彙報

◇セミナー

第2回：2007年11月2日(金)・3日(土)

「東亜海文明形成的歴史と環境」学術討論会

会場：中国上海・復旦大学歴史地理研究中心会議室

(光華楼22階)

* 報告者・報告題目については3頁を参照。

(崔弘昭 / 慶北大学校講師・

学習院大学客員研究員)

通訳：呉吉煥(東京都立大学大学院博士後期課程)

主催：学習院大学人文科学研究所

共催：学習院大学文学会

後援：日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

参加者：36名

◇集中講義

2007年度学習院大学東アジア学交流講座

第1期：2007年7月18日(水)~20日(金)

13:00~17:50

会場：学習院大学北2号館10階大会議室

講師：洪性鳩(慶北大学校師範大学専任講師・

学習院大学客員研究員)

通訳：李英美(法政大学兼任講師)

テーマ：韓中関係史をどう理解すべきか?

主催：日本学術振興会アジア研究教育拠点事業

「東アジア海文明の歴史と環境」

共催：学習院大学東洋文化研究所

助成：学習院国際交流推進基金

第2期：2007年9月12日(水)~14日(金)

13:00~17:50

会場：学習院大学創立百周年記念会館4階第4会議室

講師：安介生(復旦大学歴史地理研究中心高級研究員・

学習院大学客員研究員)

テーマ：区域歴史地理から見た中国伝統社会の変遷

主催・共催・助成 同上

* 当日の司会者による参加記と参加者の声は5~6頁を参照。

◇講演会

①学習院大学人文科学研究所講演会

日時：2007年6月28日(木)18:00~19:30

会場：学習院大学北2号館10階大会議室

「『処容説話』より見た9世紀新羅社会の一風景」

②2007外国人著名学者招聘講演会

日時：2007年8月28日(火)15:00~17:50

会場：慶北大学校愚堂教育館101号室

「国際化時代における日本の地理教育」

(諏訪哲郎 / 学習院大学文学部教授)

「近代中国における進化論の導入

— 嚴復(1854~1921)を一例として」

(高柳信夫 / 学習院大学

外国語教育研究センター教授)

③中国史学会第56回学術発表会

日時：2007年9月7日(金)・8日(土)

会場：慶北大学校愚堂教育館101号室

「対漢墓多角度研究的探索—長沙地区的西漢社会」

(上野祥史 / 国立歴史民俗博物館助教)

「秦国の雍城地区における六国文化と移民」

(柏倉伸哉 / 学習院大学)

◇セクション・スタディ・ミーティング(SSM)

第13回：2007年6月7日(木)17:30~19:00

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「唐の外国人授官傾向から見る東アジア」

(河野剛彦 / 学習院大学大学院博士後期課程)

「秦漢時代の山東半島における戦国斉の貨幣文化」

(矢沢忠之 / 学習院大学大学院博士後期課程)

参加者：19名

第14回：2007年10月4日(木)18:00~19:30

於北2号館6階人文科学研究所会議室

「古代東アジア海と会稽郡」

(中西大輔 / 学習院大学大学院博士後期課程)

「雲南調査報告」

(野本敬 / 学習院大学大学院博士後期課程)

参加者：15名

◇出版

【論文】

福島恵「唐代的粟特人と“東亜海”交流」『中国史研究』
(中国史学会)第46号、2007年2月

張東翼「1366年高麗国征東行中書省の咨文についての検討」『アジア文化交流研究』(関西大学東西学術研究所アジア文化交流研究センター)第2号、2007年3月

濱川栄「漢代以前における『中原』の位置と意義」『中国史研究』第49輯、2007年8月

村松弘一「古代東アジア史における陂池—水利技術と環境—」『中国史研究』第49輯、2007年8月

【調査報告】

市来弘志・下田誠・福島恵「東亜海文明的歴史と環境—2006年度調査報告—」『中国史研究』第49輯、2007年8月

家永遵嗣「能登半島と列島の東西交流」『史学会会報』(学習院大学史学会)第153号、2007年10月

◇成果発表

①学習院大学史学会第23回大会

日時：2007年6月16日(土)

会場：学習院創立百周年記念会館小講堂

「東アジア海の文明を求めて」

(鶴間和幸 / 学習院大学文学部教授)

②中国秦漢史研究会第十一届年会暨国際学術研討会

日時：2007年7月27日(金)

会場：長春市前進大厦

「秦漢時期的東亜海域」

(鶴間和幸 / 学習院大学文学部教授)

「關於秦漢時期的非漢族社会及中央政府的支配」

(中村威也 / 大東文化大学東洋研究所客員研究員)

「秦漢時代山東半島の戦国齊の貨幣文化」

(矢沢忠之 / 学習院大学大学院博士後期課程)

③古代世界研究会

日時：2007年9月22日(土)

会場：明治大学駿河台校舎

“History and Environment of the civilization in the Ancient East Asia Sea compared with the civilization in the Mediterranean Sea”

(Kazuyuki Tsuruma, University of Gakushuin)

④東亜人文学会第8回国際学術大会

日時：2007年10月20日(土)

会場：嶺南大学校人文館講堂

「日本における『東アジア世界』論の展開—東アジア海文



復旦大学歴史地理研究中心会議室にて・鶴間教授の報告
(2007年11月2日)

編集後記

4月の韓国・清州の忠北大学における国際学術シンポジウム(平成19年度第1回セミナー)に引き続き、11月には中国・上海の復旦大学にて第2回東アジア海文明セミナーを開催することができました。日・中・韓の交流はさらに密になっています。

第4号では上記のセミナーのほか、夏期に実施された2つの共同調査の成果や東アジア学交流講座の参加記など掲載しております。ご高覧いただけましたら幸いです。

(M.S.)

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業
「東アジア海文明の歴史と環境」
ニューズレター海雀 Umi-Suzume 第4号
発行編集：学習院大学アジア研究教育拠点事業事務局
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
Tel：03-3986-0221 (内線5743)
Fax：03-5992-9218 (人文科学研究所)
e-mail：asia-off@gakushuin.ac.jp
HP：<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~asia-off/index.html>
発行日：2007年12月25日
印刷：株式会社理想社

